

道徳科の充実に向けて

－「校内研修パッケージ」を活用した校内研修の充実－

義務教育研修課 主任指導主事兼課長 矢田 一
主任指導主事 高舘 裕児
主任指導主事 古林 達也
主任指導主事 遠山八千代
指導主事 田中 賢司

はじめに

平成30年度の小学校に続いて、令和元年度から中学校でも道徳科が全面実施となり、全国の小・中学校では年間35時間（小学校第1学年は34時間）以上、教科書を主たる教材とした道徳科の授業が展開されている。県教育委員会では、全面実施に向けて「指導と評価は一体である」との考えの下、兵庫県道徳教育実践推進協議会から助言等を受け、「教員の授業力向上」を最重要課題として様々な方面から教員の支援を行ってきた。その一つとして、授業研究を促進し、道徳の時間を要とした道徳教育を充実させ、子どもたちの豊かな心を育成することを目指し、平成27年度から「指導資料」（図1）を作成し各校に配布してきた。

平成27、28年度版「指導資料」では、「授業力向上」を主たる内容とし、適切に教材の構造等が分析できる「教材分析シート」や「授業記録」を使った授業改善のポイントなどを掲載している。また、平成29年度版「指導資料」は、教科化にあたって多くの教員の課題の一つと考えられる「評価」を主たる内容とし、「評価」の意義や「評価」に向けた子どもの見取り等を具体的に示している。しかし、学校現場ではこれらの「指導資料」が個々の教員にその有効性が十分に理解されず、授業の充実に向けて適切に活用されていない状況が散見された。



図1 兵庫県教育委員会作成の「指導資料」

そこで、平成30年度は、当教育研修所が実施した研修講座「道徳科授業づくり講座」において、「指導資料」の周知状況や校内研修等での活用状況等について実態を調査し、これら「指導資料」が適切に活用され、教員一人一人の授業力が向上することを目指して研究に取り組んだ¹⁾。

さらに2年目となる本年度は、平成30年度の研究で明らかとなった教員の「不安感」や「負担感」の大きな要因である道徳科の「評価」に焦点を当て、「指導と評価の一体化」を意識した授業づくりの在り方について研修講座を企画することとした。そして、この研修講座の前後で実態調査を行い、教員の「不安感」や「負担感」の軽減につながる手立てを明らかにするとともに、研究協力校での検証を踏まえ、道徳科の授業づくりに向けた校内研修の充実のための「校内研修パッケージ」の作成に取り組んでいく。

1 研究の経緯

(1) 平成30年度の研究について

平成30年度の研究では、当教育研修所が実施する研修講座「道徳科授業づくり講座」を受講した小・中学校教員を対象に実態調査を実施し、道徳の時間の教科化における教員の意識等を把握した。調査から明らかになったことは、道徳の時間の教科化に対する教員の「不安感」や「負担感」は小・中学校ともに大きいこと、「指導資料」は多くの教員が知っているが、校内研修で活用されている割合は低いことであった。研究グループは、これらのことを予め想定し、受講者の「不安感」や「負担感」の軽減に繋げるために、「指導資料」の内容を基にした「道徳科授業づくり講座」を実施した。講座後には、受講者の「不安感」や「負担感」が軽減したかなどを調査し、さらに「不安感」や「負担感」が軽減された理由についても記述式で調査した。主な記述内容としては、『教材分析シート』を活用することで、授業を組み立てるポイントが理解でき、見通しが持てるようになった』『読み物教材』の取り扱い方が分かり、不安が軽減した』『しっかり研修すれば、できると思った』『授業力を付けるチャンス』など、肯定的かつ意欲的な言葉が見られた。

これらのことから、「指導資料」を適切に活用することで、教員の「不安感」や「負担感」の軽減に繋がることが改めて確認できた。これを踏まえ、教員一人一人の授業力向上を目指し、道徳科の充実に向けた手立てとして「校内研修パッケージ（試案）」の作成に取り組んだ。

作成にあたっては、軽減の理由から得られた要素に「指導資料」から抽出した要素を加え、次のように3つの視点で整理した。

道徳科の充実に向けた3つの視点

一方、教科化で求められている「評価」も教員の「不安感」や「負担感」の大きな一因となっているため、その軽減に向けた手立てを改めて検討する

- ・読み物教材の分析により、中心発問の場면을焦点化する。
- ・「教材分析シート」の活用と発問を吟味する。
- ・授業改善に繋がる振り返りをする。

必要があることと、作成した「校内研修パッケージ（試案）」が、教員にとって本当に活用しやすいものであるかを学校現場の実践を基に検証する必要があることを次年度に取り組むべき課題とした。

(2) 令和元年度の研究について

平成30年度の研究を受けて、令和元年度「道徳科授業づくり講座」は、「授業づくり」をさらに「評価」に繋げる内容に改善した。また、教科化の全面実施から小学校は2年目、中学校は1年目を迎えた教員の意識を把握するために平成30年度の研究同様、受講者を対象に実態調査を実施することとした。

この実態調査では現状の把握に加え、上記の研修講座の受講前後で受講者の意識がどのように変化するかについても把握することで、講座のどの内容が特に受講者の「不安感」や「負担感」の軽減に繋がったかを明らかにし、これらを基に「校内研修パッケージ（試案）」のさらなる改善を図ることとした。また、改善を図った「校内研修パッケージ」（以下『校内研修パッケージ（改善版）』という。）について、学校現場での効果的な活用を検討するため、研究協力校による検証を実施し、そこで得られた課題に応える新たな「校内研修パッケージ」（以下「令和元年度版『校内研修パッケージ』」という。）として再構成することとした。

2 「道徳科授業づくり講座」と実態調査を通して見えてきたもの

(1) 「道徳科授業づくり講座」での提案

平成30年度の研修講座は、小学校で道徳科が全面実施となったことから、「教材分析シート」を活用した道徳科の授業づくりを中心に実施した。研修講座の受講により、「不安感」や「負担感」の軽減が見られたものの、「評価」については、依然多くの受講者が「不安感」や「負担感」を抱いていた。そこで、令和元年度の研修講座は、授業づくりの内容をさらに「評価」に繋げるよう改善し、受講者の「不安感」や「負担感」が軽減されるような構成とした。

ア 道徳科の「評価」にあたって重視する2つの視点の理解

道徳科の「評価」については、子どもの学習状況及び成長の様子を見取る評価と、教員の授業に対する評価があるが、小・中学校学習指導要領（平成29年度告示）解説では、以下のように示されている。

1 評価の基本的態度

（中略）道徳性を養うことを学習活動として行う道徳科の指導では、その学習状況や成長の様子を適切に把握し評価することが求められる。児童生徒の学習状況は指導によって変わる。道徳科における児童生徒の学習状況の把握と評価については、教師が道徳科における指導と評価の考え方について明確にした指導計画の作成が求められる。道徳性を養う道徳教育の要である道徳科の授業を改善していくことの重要性はここにある。（中略）

2 道徳科における評価

（1）道徳科に関する評価の基本的な考え方

（中略）評価に当たっては、特に、学習活動において児童生徒が道徳的価値やそれらに関わる諸事象について他者の考え方や議論に触れ、自律的に思考する中で、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視することが重要である。（中略）

（※下線は筆者による）

ここで示された内容のうち、特に下線部で示された「授業改善」と「評価にあたっての2つの視点」を重視し、以下に示す「わかる授業づくり」の考え方を活かした研修講座を企画した。

イ 「わかる授業づくり」の考え方を活かす

当教育研修所の研究「若手教員の授業力向上に向けた導入期の研修の在り方について」において、わかる授業づくりに向けて、「授業づくりは、授業のねらいを明らかにすることから始めることになる。しかし、（中略）『ねらいを明確に』と伝えたところで実感を伴うものにはならない。そこで、授業後の「めざす子どもの姿」を思い描くことを授業づくりのスタート地点に位置付けた。1時間の授業でどのように変容させたいのかを具体的な児童生徒の姿でイメージできるようにするのである。」とある（図2）²⁾。

これは、「真正の評価」論の第一人者であるG. ウィギンズとJ. マクタイが提唱する「逆向き設計」論で示されている「事後に何を身に付けさせたいかという教育の成果から逆向きに授業を設計し、指導後に考えられがちな評価方法を先に構想する」という考え方に繋がるものである。

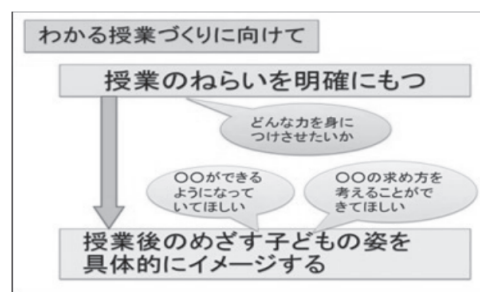


図2 わかる授業づくり

ウ 「道徳科授業づくり講座」の研修内容

令和元年度「道徳科授業づくり講座」では、「わかる授業づくり」の考え方を活かし、まず、教材で考えさせたい内容項目からねらいを設定し、前述の2つの視点を踏まえ、次のように「めざす子どもの姿」をイメージすることとした。

【「めざす子どもの姿」のイメージの例】

- ・「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか」という視点を踏まえたイメージの例
「〇〇さんの意見を聞いて、□□だと思っていたことが、◎◎だという面もあるのだと思いました。」
- ・「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか」という視点を踏まえたイメージの例
「これまで〇〇だと思っていたことが、（今日の授業を受けて）□□だということに気がきました。」

次に、イメージした内容をより多く持つために、複数の受講者で「めざす子どもの姿」を共有し、「めざす子どもの姿」、中心発問、教材分析を相互に検討するような授業づくりを目指した。

演習・協議については、次のようなステップで実施した。

- 1 教材を分析して内容項目を確認し、ねらいを設定する。
 - 2 ねらいをもとにして「めざす子どもの姿」を付箋に記入する。
 - 3 4人程度で班を編成し、個人で記入した付箋を班内でワークシートに貼ることで可視化し、「めざす子どもの姿」を共有する。
- (図3)
- 4 前述した2つの視点を踏まえて、班でワークシートの付箋を整理する。
 - 5 「めざす子どもの姿」を踏まえて、中心発問を考える。
 - 6 班で模擬授業を実施し、子どもの反応を想定する。
 - 7 想定した子どもの反応をもとに、教材分析、中心発問を再度吟味する。

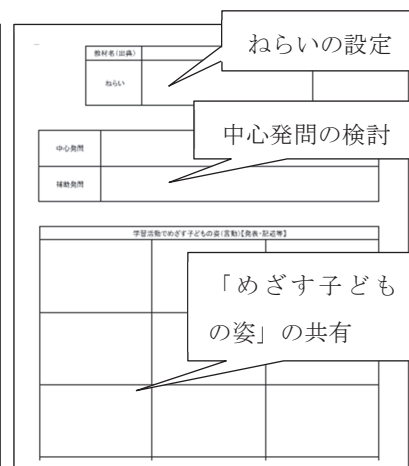


図3 「めざす子どもの姿」を整理するワークシート

このように「めざす子どもの姿」を具体的にイメージした授業づくりをすることで、受講者は授業における子どもの見取りが容易となり、「評価」についての理解に繋がるものと考えた。

(2) 受講者を対象とした実態調査

ア 調査の概要等

調査は、本年度の「道徳科授業づくり講座」の受講者（小学校 104 人、中学校 83 人）を対象に、受講前と受講後の2回に分けてアンケート形式で実施した。なお、受講者のうち、小学校 91.3%、中学校 84.3% は中堅教諭等資質向上研修の対象者であることから、道徳科の授業についてある程度の経験を積んできている。これらの結果の一部は、平成30年度の研究において調査した結果とも比較した。

イ 「道徳科授業づくり講座」受講前のアンケート

① 「道徳の時間」の教科化について

質問 「道徳の時間」が教科化されたことに不安や負担を感じるかどうか。また、不安や負担を感じると回答した教員にはその理由として該当するものはどれか。

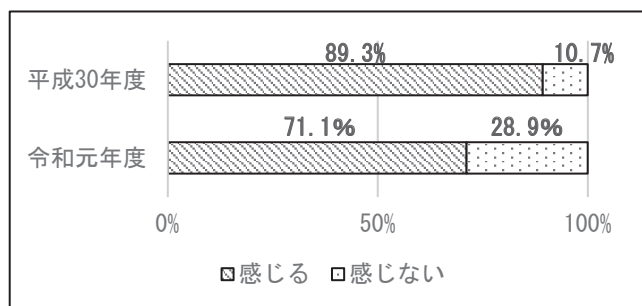


図4 「不安」を感じている教員の割合（小学校）

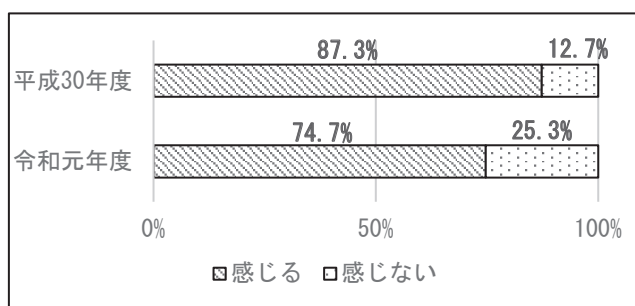


図5 「不安」を感じている教員の割合（中学校）

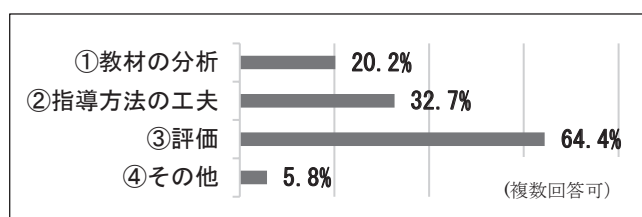


図6 「不安」に思う理由（小学校）

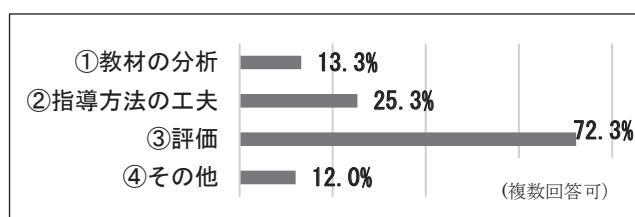


図7 「不安」に思う理由（中学校）

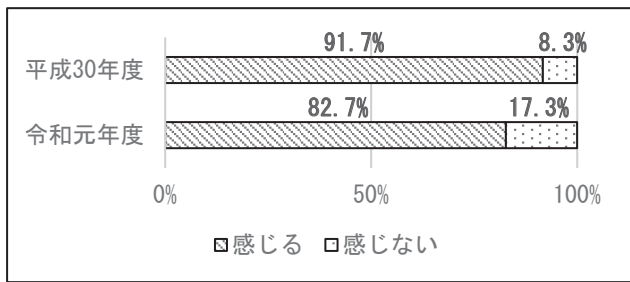


図8 「負担」を感じている教員の割合（小学校）

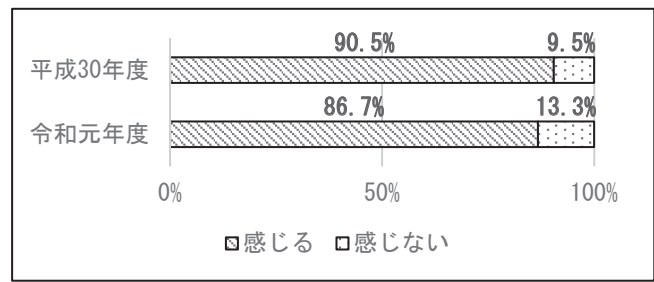


図9 「負担」を感じている教員の割合（中学校）

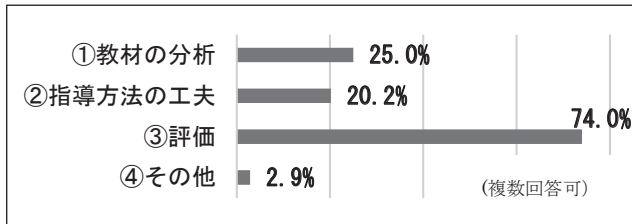


図10 「負担」に思う理由（小学校）

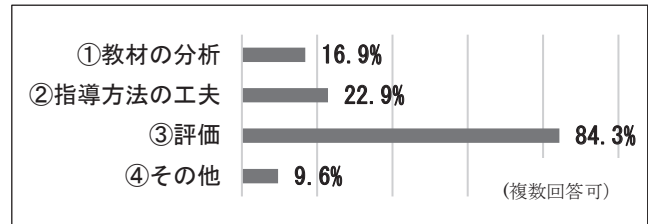


図11 「負担」に思う理由（中学校）

②道徳科に関する校内研修について

質問 道徳科に関する校内研修を実施しているかどうか。また、実施していると回答した教員には、その内容として該当するものはどれか。

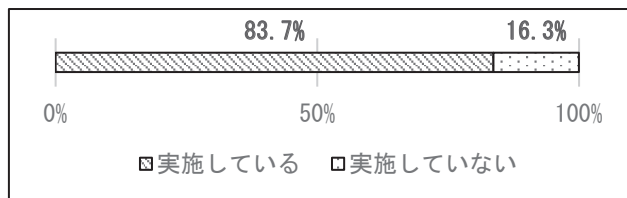


図12 校内研修を実施していると回答した教員の割合（小学校）

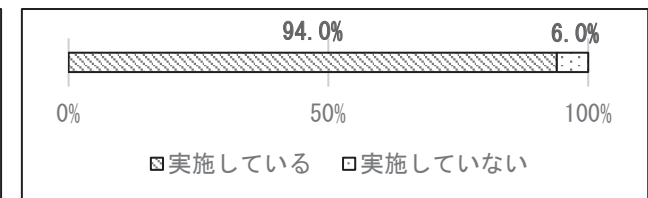


図13 校内研修を実施していると回答した教員の割合（中学校）

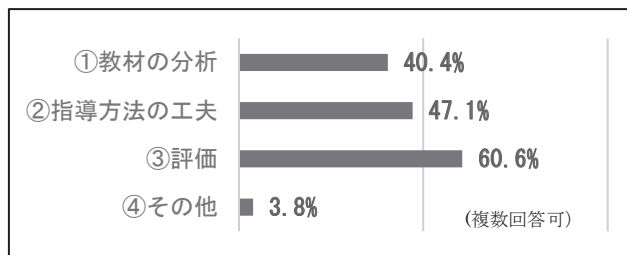


図14 校内研修の内容（小学校）

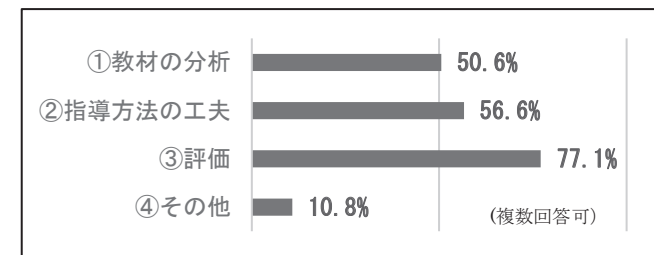


図15 校内研修の内容（中学校）

③「評価」について

質問 道徳科で求められている「評価」について正しく理解しているかどうか。

指導要録の「学習状況及び道徳性に係る成長の様子」欄に記載する内容として、次の文例が適切か。
 (文例) 休み時間に友達が困っていると積極的に助けてあげるなど、思いやりの心が育ってきました。

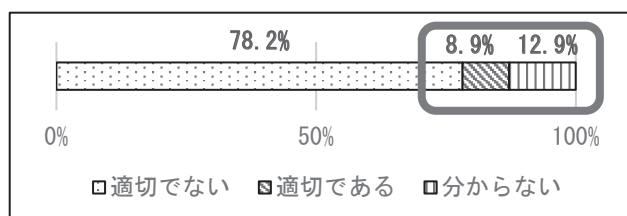


図16 文例が適切かどうかの回答の割合（小学校）

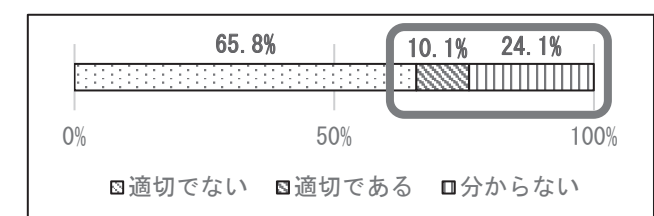


図17 文例が適切かどうかの回答の割合（中学校）

ウ 「道徳科授業づくり講座」受講後のアンケート

【質問】「道徳科授業づくり講座」を受講して、教科化による「不安感」や「負担感」が軽減されたかどうか。

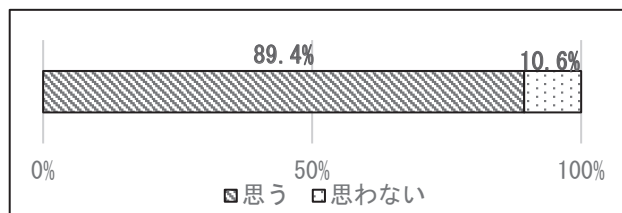


図18 「不安感」が軽減した小学校教員

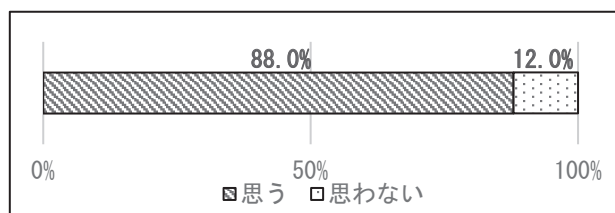


図19 「不安感」が軽減した中学校教員

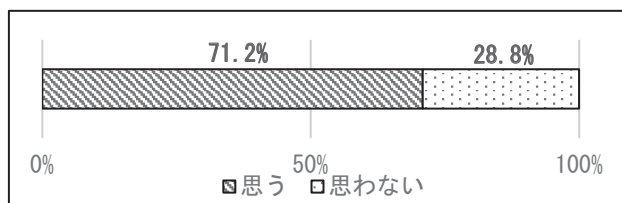


図20 「負担感」が軽減した小学校教員

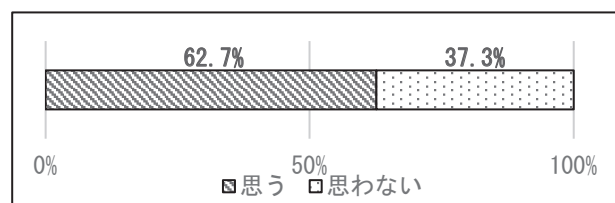


図21 「負担感」が軽減した中学校教員

表1 「不安感」や「負担感」が軽減した理由（受講後のアンケートより）

- ・「教材分析シート」の使い方を通して、「めざす子どもの姿」を想定してから、中心発問を考えるという発想の授業づくりについて理解できた。
- ・「めざす子どもの姿」について付箋を出し合うことで多面的・多角的に考えられたことが、とてもよい気付きになった。校内の研修でも使えそうだ。
- ・多くの教員で子どもの反応を考えたことで、いろいろな子どもの姿を共有することができた。
- ・「めざす子どもの姿」を想定することで「評価」を意識した授業づくりのイメージが湧いた。

(3) 考察

研修講座の受講前アンケートでは、平成30年度同様、道徳の教科化に対する教員の「不安感」や「負担感」が依然大きいことが明らかとなった。また、「不安感」や「負担感」が生じる要素として道徳科の「評価」が大きな割合を占めていることも明らかとなった。（図4～11）

また、道徳の教科化に向けて、ほとんどの学校で校内研修が実施されており、その内容として「評価」に関する研修を実施している割合が高いことも明らかとなった。（図12～15）しかし、指導要録の「学習状況及び道徳性に係る成長の様子」欄に記載する内容についての質問では、「適切である」「わからない」の回答が小学校では、21.8%、中学校では、34.2%と高い割合を示している。（図16、17）これらのことから、「評価」に関する校内研修が実施されているにもかかわらず、依然として「評価」について正しく理解できていない教員も存在し、「不安感」や「負担感」の原因となっていると考えられる。

研修講座受講後のアンケートでは、研修講座を受講したことで「不安感」や「負担感」が軽減されたとの結果が得られた。（図18～21）特に、研修講座の内容のうち、「めざす子どもの姿と評価」の内容が、「不安感」や「負担感」の軽減に繋がっていることがアンケートの記述から読み取れた。（表1）

そこで、これらのことから得られた視点を「校内研修パッケージ（改善版）」に盛り込むことで、「不安感」や「負担感」を軽減させ、授業の充実に繋げることができるのではないかと考えた。

3 校内研修の充実に向けて（研究協力校の取組から）

(1) 「指導資料」を効果的に活用した校内研修

ア 「校内研修パッケージ（試案）」の改善について

令和元年度「道徳科授業づくり講座」で得られた視点を基に、平成30年度に作成した「校内研修パッケージ（試案）」の内容を精選・再整理し、次の3つのアプローチとして示した。

【道徳科の授業の充実に向けたアプローチ】

「教材を分析する」 「中心発問を吟味する」 『めざす子どもの姿』をイメージする

イ 研究協力校の取組から

研究協力校の小学校2校、中学校1校において「校内研修パッケージ（改善版）」を活用した校内研修を実施し、「校内研修パッケージ（改善版）」の効果や課題について聞き取りを行った。

また、「不安感」や「負担感」の軽減に繋がったか、指導と評価の一体化に向けた授業づくりが理解できたか等についても聞き取った。

研究協力校からの意見のうち、「校内研修パッケージ（改善版）」を活用することが、道徳科の授業づくりに向けて効果的な点を示した意見を○、改善が必要な点を示した意見を●で以下に示す。

(7) A 小学校の取組から

A小学校は小規模の学校で、各担任が道徳科の授業づくりを熱心に取り組んでいるが、学校全体や学年等で校内研修を行うことは少なかった。「評価」にあたって重視する2つの視点から子どもを見取る研修については、これまで行っていなかった。

【「校内研修パッケージ（改善版）」活用後の意見】

- 6回の授業づくりについて実施した。慣れてくると短時間で授業づくりができるようになった。
- 協議する内容が絞れるため、短時間で行えた。
- 子どもの反応を想定していたため、深めるための問い返しが上手くできた。
- 「めざす子どもの姿」を教員間で共有していたため、授業中の子どもの変容を見取りやすかった。
- 教材分析で、焦点化するポイントがわかりにくい。
- 今後、授業研究を進めていく中で、参考となる授業映像などがあれば見たい。

(4) B 小学校の取組から

B小学校は中規模の学校で、道徳科の授業づくりの校内研修は、年間計画に位置付けられており、道徳教育推進教師を中心に積極的に行っている。普段から短時間での教材研究はできているが、「指導と評価の一体化」を意識した授業づくりについては模索中である。

【「校内研修パッケージ（改善版）」活用後の意見】

- 検討すべき内容が焦点化され、「めざす子どもの姿」を教員間で共通理解することができた。
- 中心発問や補助発問が十分に吟味できたため、ねらいに迫る授業づくりができた。
- 「評価」にあたって重視する2つの視点に絞って協議したため、ねらいに迫れていたかどうかが明確になった。
- 道徳科の授業づくりにおける「不安感」や「負担感」が軽減され、道徳科の授業づくりに対して前向きに取り組めるようになった。
- 「校内研修パッケージ」を使用することで、経験年数にかかわらず共通の土台で協議できた。
- 普段の授業づくりに必要な時間の目安がつかめた。
- 「めざす子どもの姿」を記入することで、自信を持って授業に臨むことができた。
- 「教材分析シート」が使える教材かどうか分からないことがあった。

(ウ) C中学校の取組から

C中学校は中規模の学校で、教科化に向けて平成30年度から校内研修を進めており、道徳科の授業づくりに関する教員の意識は高い。また、校内研修は、学年や小集団で実施している。(図22)

【「校内研修パッケージ(改善版)」活用後の意見】

- 模擬授業をすることで、多面的な視点で生徒の姿をイメージすることができ、授業の参考になった。
- 事前に「めざす子どもの姿」を考えることで、ねらいに迫る子どもの発言を見取ることができた。
- 「校内研修パッケージ(改善版)」のどのアプローチから始めればよいか、わかりにくい。



図22 校内研修の様子(C中学校)

(2) 校内研修の更なる充実にに向けて

ア 研究協力校の検証から得られた視点について

研究協力校による実践から得られた教員の意見をもとに検証し、「校内研修パッケージ(改善版)」活用に向けたさらなる改善の視点が明らかとなった。そこで、明らかとなった改善の視点により次のように改善した。

改善につながる意見1 教材分析シートが上手く使えない。	⇒	・道徳上の問題に焦点化するためのポイントを強調した
改善につながる意見2 パッケージのどのアプローチから始めればよいか、わかりにくい。	⇒	・「教材を分析する」を起点に、「めざす子どもの姿」「中心発問の吟味」を往還しながら授業づくりをすることを明確にした。 ・「校内研修パッケージ」でできることを明確に示した。
改善につながる意見3 参考となる授業映像などを知りたい。	⇒	・参考資料(校内研修・授業づくりの充実に向けて)を加えた。

イ 令和元年度版「校内研修パッケージ」の活用と発信に向けて

「指導資料」を活用した校内研修の進め方については、「校内研修パッケージ(改善版)」の活用で十分効果があることが、研究協力校の検証で確認できた。さらに、校内研修の実施も学校全体だけではなく、研修対象を若手教員や学年等に限定して実施するなど、研修の実施形態も学校の実態に即して工夫することも効果的であると考えられる。以上のことを踏まえ、検証から得られた改善の視点を取り入れた令和元年度版「校内研修パッケージ」を作成した。

作成した令和元年度版「校内研修パッケージ」は、今後、当教育研修所で実施する「道徳科授業づくり講座」や初任者研修、出前研修等で活用する予定である。併せて、県内の教員が活用しやすいように、Webサイト等で配信し周知を図りたい。なお、「校内研修パッケージ」については、これからもより活用しやすいものとするために改善を進めていく。

おわりに

本研究は2年間にわたって行い、本県が作成した「指導資料」が各学校において適切に活用され、教員一人一人の授業力が向上することを目的に進めてきた。研究2年目の「道徳科授業づくり講座」では、教科化によって示された「評価」が、小・中学校教員の「不安感」や「負担感」の大きな要素であることから、「評価」にあたって重視する2つの視点を理解するとともに、「めざす子どもの姿」をしっかりとイメージし授業づくりができるように企画した。この「指導と評価の一体化」を意識した研修講座が、研修講座前後の実態調査から、教員の「不安感」や「負担感」の軽減に繋がったことが明らかになった。これら調査を基に、平成30年度に作成した「校内研修パッケージ（試案）」を改善して、これを研究協力校において実践、検証し、令和元年度版「校内研修パッケージ」として作成した。

この研究を通して、研究協力校の教員からは、「短時間で少人数でも研修できた」「次の授業づくりが楽しみとなった」「評価に対する共通認識をもつ機会が増えた」「評価に対して自信をもって取り組めた」等の意見も得られた。このように校内研修について、当研修所の研修講座の内容を踏まえた「校内研修パッケージ」の活用を日常的に行うことが、教員の授業力向上に繋がるとともに、学習指導要領で求められている「道徳科の評価の妥当性、信頼性等の担保」に繋がると考えられる。

今後は、「指導資料」と各学校の橋渡し役となるよう作成した令和元年度版「校内研修パッケージ」の普及を進めていくとともに、より学校現場に即した使いやすいものとなるように内容の充実を図っていきたい。

最後に、本研究の趣旨を理解し、快くご協力いただいた研究協力校の学校長をはじめ教職員の皆様に心より謝意を表する。

注)

- 1) 矢田 一・栄 久視・高舘裕児・田中賢司,「道徳科の充実に向けて-「指導資料」を活用した校内研修パッケージの作成-」『研究紀要第129集』,兵庫県立教育研修所,2019, pp. 1-12
- 2) 足立延也・岩浅克友希・池内晃二・田中賢司,「若手教員の授業力向上に向けた導入期の研修の在り方について」『研究紀要第126集』,兵庫県立教育研修所,2016, pp. 1-14

《参考文献》

- ・兵庫県教育委員会「指導資料『特別の教科 道徳』全面実施に向けて」,2016
- ・兵庫県教育委員会「指導資料『特別の教科 道徳』全面実施に向けて②」,2017
- ・兵庫県教育委員会「指導資料『特別の教科 道徳』全面実施に向けて③」,2018
- ・兵庫県教育委員会「指導資料 道徳科の全面実施に向けて」,2019
- ・小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編,2017
- ・中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編,2017
- ・村川雅弘,『ワークショップ型教員研修はじめの一步』,教育開発研究所,2016
- ・ウィギンズ,マクタイ 西岡 加名恵訳『理解をもたらすカリキュラム設計-「逆向き設計」の理論と方法』,日本標準,2012

道徳ははじめの一步

～短時間・少人数でできる！！～

次のことが理解できます



- ・ **指導と評価が一体となった授業づくり**

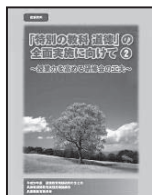
「めざす子どもの姿」をもとに、指導と評価の一体化に向けた授業づくりが理解できます。

- ・ **「指導資料」(兵庫県教育委員会)の効果的な活用**

「指導資料」の活用ポイントが理解できます。



「指導資料①」



「指導資料②」



「指導資料③」



「指導資料④」

授業づくりの3つのアプローチ

(注：これらは教材研究の流れを示すものではありません。)

- ☐ **教材を分析する**



「教材分析シート」で、教材の構造を確認し、内容項目や発問を検討しましょう。

- ☐ **中心発問を吟味する**



「めざす子どもの姿」に向かう発問を吟味しましょう。

- ☐ **「めざす子どもの姿」をイメージする**



授業中の発言や終末の振り返り等における子どもの言動を想定しましょう。

道徳科の評価にあたって重視する2つの視点

「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか」
「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか」



兵庫県立教育研修所

教材を分析する



【事前準備】教材、「教材分析シート（作成済み）」、「学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」
 【方 法】各自が作成した「教材分析シート」を基に、教材を構造的に捉え、発問を検討する。

【ポイント】before（主人公が変化する前）、変化のきっかけとなった出来事（自覚）、after（主人公が変化した後）の場面に焦点化することが大切。 焦点化した場面に基に、発問を検討する。		
時間	流れ	留意点
5分	焦点化する場面を検討する	- 各自が作成した「教材分析シート」の(1)骨格、(2)構図、(5)主題と内容項目を確認し、共通理解する。 ☞「指導資料①」p 8～11 (1) (2) (5)
15分	発問を検討する	- 焦点化した場面に基に、(3)中心発問、(4)予想される反応、(6)中心発問以外の場面の発問を検討する。 ☞「指導資料①」p 8～11 (3) (4) (6)

※(7)ねらい、(8)本時で考える道徳的価値については、「指導資料①」p 11を参考に記入する。

中心発問を吟味する



【事前準備】教材、「拡大版『教材分析シート（作成済み）』」（記入用）、ホワイトボード
 【方 法】先生役と子ども役に分かれ、模擬授業をする。

【ポイント】模擬授業を行うことで、中心発問の場面や問い方が適切であるか、ねらいに迫れているか、という視点で、再考する。		
時間	流れ	留意点
15分	1 模擬授業をする	- 中心発問に絞って、模擬授業をする。 ☞「指導資料②」p 8～9 「指導資料③」p 8～9 【先生役】対話により子どもの考えが深められるよう、中心発問での問い返し等を工夫する。 【子ども役】自校の子どもならどう答えるかを想定して答える。
	2 模擬授業を振り返る	中心発問は適切であったか、また、効果的な問い返しについて協議し、発問等を再考、改善する。 ※時間があれば、改善した発問や問い返しを基に、再度模擬授業をし、発問等を再考する。

「めざす子どもの姿」をイメージする

【事前準備】教材、「教材分析シート（作成済み）」、「学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」、付箋
 【方 法】分析した内容をもとに、ねらいから「めざす子どもの姿」を付箋に記入し、共有する。

【ポイント】 次の①、②の視点で「めざす子どもの姿」をイメージすることが大切。 【視点①】 一面的な見方から多面的・多角的な見方へ発展しているか。 【視点②】 道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか。		
時間	流れ	留意点
5分	付箋を記入する	①、②の視点で子どもが発表したり、記述したりする姿をイメージして付箋に記入する。（一人：2～4枚） ☞「指導資料③」p12～14（付箋の記入例）
15分	付箋を共有する	- イメージした子どもの姿を共有することで、教師自身が気付かなかった授業中の多様な子どもの姿が想定できます。また、余裕を持って学習状況の見取りをすることができます。 「めざす子どもの姿」をたくさんイメージすることは、イメージした姿となるような学習活動を設計することや、そのための発問の吟味にもつながります。 ☞『中心発問を吟味する』へ



「〇〇さんの意見を聞いて、□□だと思っていたことが、◎◎だという面もあるのだと思いました。」

「これまで〇〇だと思っていたが、（今日の授業を受けて）□□だということに気がきました。」

子どもの学習状況を見取る

☞「指導資料③」p15～19 「指導資料④」p19～22



評価にあたっては、「一面的な見方から多面的・多角的な見方へ発展しているか。」「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか。」という2つの視点を基に、子どもの記述（ノート等）、発言（発表、つぶやき等）、観察（表情等）、ヒアリングを通して子どもの学習状況を見取りましょう。

【ポイント】

授業の前にあらかじめ「めざす子どもの姿」を想定しておくことで、授業中の子どもの姿をしっかり見取ることができます。その積み重ねが、学期や学年といった大くくりの評価をするための材料につながります。

参考資料

～校内研修・授業づくりの充実に向けて～

文部科学省

内容項目など、道徳科の
基本がわかるよ

「道徳教育」

「文部科学省 道徳教育」で検索

URL:https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/doutoku/

- ・学習指導要領解説 特別の教科道徳編（小学校・中学校）
- ・「私たちの道徳」（小学校・中学校）
- ・『私たちの道徳』活用のための指導資料（小学校・中学校）
- ・「読み物資料集」（小学校・中学校）



「道徳教育アーカイブ ～「道徳科」の全面実施に向けて～」

「文部科学省 道徳教育アーカイブ」で検索

URL:<https://doutoku.mext.go.jp/>

- ・道徳教育について
- ・実践事例：授業映像、指導案など
- ・参考資料：教育委員会作成資料等



独立行政法人教職員支援機構（NITS）

校内研修で活用できる
講義の動画があるよ

「オンライン講座」

「NITS オンライン講座」で検索

URL:<https://www.nits.go.jp/materials/>

- ・校内研修シリーズ：道徳科に求められる評価
- ・道徳科の授業の充実を図るために

「新学習指導要領編」

- ・中学校学習指導要領 特別の教科 道徳（道徳科）のポイント



兵庫県教育委員会

兵庫県がめざしている
道徳教育がわかるよ

「兵庫県道徳教育webページ」

「兵庫県教育委員会 道徳教育」で検索

URL:<https://www.hyogo-c.ed.jp/~gimu-bo/doutoku/doutokuweb.htm>

- ・指導資料
- ・兵庫版道徳教育副読本 指導案等



「道徳ははじめの一步～短時間・少人数でできる！！～」

令和2年3月 発行

発行者 兵庫県立教育研修所 義務教育研修課
〒673-1421

兵庫県加東市山国2006-107

TEL : 0795 (42) 3102 FAX : 0795 (42) 5393